Japan Society of Research on Early Childhood Care and Education

P13

「人とかかわる力を育む」ために

多田琴子
（兵庫教育大学学校教育学部附属幼稚園）

1．はじめに

幼児期において「ふさわしい生活」を考えるとき、まず幼児の興味、関心に即した環境が必要である。そしてそこに、人とかかわるくらしがあることが必然であると考えている。幼児期に「ふさわしい生活」の中で、受容され、自発し、自主的に生活することで幼児期にこそ身に付けておきたい人間形成の基礎が培われていくものと考える。

本園（兵庫教育大学学校教育学部附属幼稚園）においても、幼児の「ふさわしい生活」を支えるべく、研究主題「その子らしさを発揮し、共に生きる力を育む」を設定し取り組んでいる。昨年はこの研究主題を設定して２年目であり、公開教育研究会では幾多の課題を見いだした。平成13年度は、「人とかかわる力を育む」をサブテーマに設定し研究を進めることとした。

2．研究の目的

近年、青少年の人とかかわる力の希薄化がとりだたされている。本園の幼児の実情も例外ではない。

そこで、次の２点を研究の目的とする。

①「人とかかわる力を育む」本園の保育を創り出す。

②保育の実践力を教師自身が評価する。

3．研究の方法

①園内研修を通して②レポート（基礎理解・実践・評価）の読み取り③「人とのかかわり」から、園内環境の見直しをする④先行研究の読み取りと本園の取り組みの比較検討

4．研究の実際

本文では、上記の研究方法②のレポートの読み取りから「人とのかかわりを育む」課題への取り組みを述べる。

本園は「幼年教育研究会」という会員制の研究会を、近在地域の幼稚園教諭と組織している。本年度は、３回の研究会ごとに、持参するレポートの内容を設定した。第１回(H.13.6.27)は基礎理解編とし、会員各自が「人とかかわる力が何故必要か」を、自分の保育実践を振り返りながら理解している内容をまとめる。第２回(H.13.11.22)は実践編とし、自分の基礎理解と１回目の研究会で話し合った内容を基に、「人とのかかわる力を育む保育の実践」を、具体的な幼児の姿や教師のかかわりの姿からまとめる。第３回(H.14.1.24)は「人とかかわる力がどの様に育ったか」を目の前の幼児の育ちに照らし合わせて、自分の実践を評価する。

ここでは、第２回の実践編レポートを読み取りから幼児の「人とかかわる力」の発達過程を明らかにし、教師の具体的なかかわりの視点を導き出すものである。

≪レポートから読み取り≫

①目的（実践のめざすもの）

②内容（取り扱った活動・場面）

③教師のかかわりの姿勢

この３点から整理したものが<表１>である。

<表１>

第２回幼年研レポートの読み取り

	目　的（実践のめざすもの）	内　容（取り扱った活動・場面）		教師のかかわりの姿勢
1	自分の思いと相手の思いを意識し、相手を思いやり一緒に遊ぶ楽しさ	ロげんかから順番交代へ	個	自己中心性を押さえ込んでしまうのではなく、思いを聞き、相手に伝える
2	安心できる居場所をつくる	けんかで自分が悪くても謝らないのは負けたと思うから	個	幼児の行為が正か否かではなく、その内面を求めて話を十分に聞く
3	一人一人の幼児がその子らしさを発揮できるようにする	生き物との触れあい	グ→集→個	集団の中での自己の有用感と心がつながる温かい集団を育てる
4	個が気持ちを安定させて集団生活を送る	気持ちの拠り所となる友達	個	心の動きを見極めて接する
8	集団の中の一員である存在感	ルールのある遊びを繰り返しする	集	子どもと何時も真剣に向き合い誠実にいる
10	自分自身や友達のよさに気付く	活動を振り返り、自他の思いを分かち合う	集	教師が本音を出す
12	自分の思いを表現する	高校生との触れあい	集	かかわりのねらいをしっかりもつ
13	人とかかわる喜びや満足感を味わう	未就園児とのかかわり	集	いろいろな人と触れあう場の設定
14	仲間と遊ぶ本当の楽しさ	友達と同等の立場で遊ぶ体験	個	見守る
16	あきらめずに挑戦する	友達の姿に刺激を受けて	個ー中学生	教師も共に喜ぶ
18	自分も他者に喜んでもらえるようなことがしたい、「人とかかわる嬉しさ」の経験の積み重ね	年少児を招待してお店やさんごっこ	小→集→年	保育者の役割の重要さを見つめ続ける
21	経験が自信を付けていく	不安定なB児との出会いがA児を変化させた	個	家庭との信頼関係を強める
22	・友達と遊ぶ楽しさが感じられる幼児をめざして ・自己表出し、安心して生活できる	友達から誤解される行動や自分本位の行動が見られた場面	個	公平な気持ちで仲立ちをしたりかかわり方を知らせていく
23	自分も友達も大好きな存在という満足感	ヒーローごっこ（自分の思いを出しにくいK児を捉えて）	個	思いを丸ごと受け止め、互いにやりとりができるように仲介する
24	一人一人が集団の中で自分の力を発揮し輝ける	人とのかかわりの少ないA児を通して	個	信頼関係→仲介→集団作りと援助の視点をもつ
25	自分で決めたこと興味をもったことをやりきる	揺れ動きながらもドングリごまに挑戦し続ける	個	教師間で共通理解をし、育ちの見通しを立ててK児のやりたいことを大切にする
27	子ども同士ぶつかり合いながらも問題解決の方法を学んで人と一緒に生活する楽しさを味わう	遊びを通して自分の思いを言葉で伝えていく	個	H児の気持ちを受け止めながら、相手の思いを伝えていく
28	個性やよさを発揮し意欲や自信をもつ	A子がダンスを通して友達と一緒に活動する	個	教師が側で活動に参加する
29	A児が友達と一緒に楽しい園生活をおくる	基本的生活習慣の自立からのはじまり	個	どの様な力が欠けているか考えてかかわり、家庭には根気よく取り組む
31	A児も集団でのルールを学び友達と成長していく	鬼ごっこで体を使う楽しさを知る	個	母親の情緒の安定を図り、保護者と連携する
33	・M子がいろんな友達がいることに気付いていく ・自分に目を向けてくれる友達がいることを感じる	・自然な形で友達と触れあう環境から ・年少児と年長児が共に遊ぶ場を設定する	個 年少個→年長個	まわりの幼児にM子の存在を知らせ、M子には友達が見ていることに気付く機会をつくる

NII-Electronic Library Service

＜表１＞中の文言は、会員のレポートの文章から筆者ができるだけ文中の文言を使用して端的にまとめたものである。上記の読み取りから、一人の幼児または学級としての集団が、どの様な「人とかかわる力」の発達の過程にいるか、またその実情に教師がどの様なかかわりをすればよいかがわかる＜表２＞を作成した。

「人とかかわる力」の発達過程表（兵庫教育大学学校教育学部附属幼稚園の教育課程を軸とする）　＜表２＞

教師間で日常の協力と話し合いをし、専門性を高め合う	地域社会を活用し豊かな生活体験ができるようなカリキュラムつくる										
	幼児同士が互いに友達を認め合い自分たちの生活を大切にしようとする学級をつくる										
	自己主張しつつも我慢したり譲ったりして協力し合うことが学べる学級をつくる									3　10	24
	一人一人のよさを認め学級としてうち解けた温かい雰囲気をつくる							(26)			
	年齢が異なる幼児間で、思いやりや責任感、憧れが生まれる交流をはかる							18			
	一人一人の思いや活動をつなぐ			(28)	1　33	22	23　(32)			27	
	興味関心の共有をして活動への取り組みを深める指導をする			8			16			28	
	応答性のある環境を構成する								12　13　25		
	特性を把握し、発達の実情をつかむ			4	(27)-1			(27)-2		(27)-3	
	信頼関係を築く					29		31			
	行動や心の動きを受け止め認め励ます			2		21			(25)		
	見守る（具体的な方策がない）						14				
教師の役割 ／ 本園の教育課程	Ⅰ（4～5.6月）新しい生活の中で先生と触れ合い、親しみをもつ時期	Ⅱ（5.6～9.10月）保育室やその辺の遊具に気付き、好きな遊びに取り組む時期	Ⅲ（9.10～12.1月）友だちとのつながりを求める時期	Ⅳ（12.1～3月）先生や友だちを通して園生活に親しみ、安定して過ごす時期	Ⅴ（4～5.6月）新しい園生活に、期待と不安と戸惑いを体験しながら生活する時期	Ⅵ（5.6～9.10月）好きな友だちと、遊びや場を見つけて生活する時期	Ⅶ（9.10～3月）進んで活動し、自分の思いを発揮しながら友だちと一緒に生活する時期	Ⅷ（4～5.6月）戸惑いの気持ちをもちながらも、5歳児としての自覚をもつ時期	Ⅸ（5.6～10.11月）友だちと園生活を豊かに膨らませる時期	Ⅹ（10.11～3月）自分らしさを発揮し、認めあった生活を楽しむ時期
期ごとの「人間関係」の内容	担任の先生に親しみをもち、安心感をもって生活する	保育室を中心とした安心できる場で先生や友だちとの遊びを楽しむ	みんなと同じ遊びに興味をもって、楽しんで遊ぶ	友だちのしている面白そうな遊びや好きな遊びをして、気持ちを安定させて遊ぶ	先生や友だちに親しみ、一緒に遊ぶ楽しさを知る	好きな友だちや先生と心地よい結びつきをし、かかわりを深める	自分の思いを表出しながら友だちとかかわり、同じ気持ちを共有したり、自分とは違う気持ちに気付いたりする	自分なりの思いをもち、5歳児になった嬉しさを感じて遊ぶと共に、友だちとのつながりやかかわりを楽んで遊ぶ	友だちと遊びや生活を進める中で、相手の気持ちに気付き、我慢したり譲ったりしながらも友だちのよさを知っていく	一人一人の持ち味を生かし、認めたり励ましたりし合いながら、グループや学級で共通の目当てに向かって遊び生活を進める
具体的な幼児の生活する姿	・見知らぬ生活への不安がある ・先生と共に動こうとする	・自分が安定できる場で遊ぶ ・体を動かす遊びを好む	・みんなと一緒に遊びたがる ・自分でやってみる ・トラブルが起こりやすい	・友だちへの関心が強まる ・自己主張によるぶつかり合いがおこる	・自分でできる ・なんでも言える ・先生との結びつきを求める ・園生活の基礎行動の理解ができる	・友だちと一緒に遊ぶ ・けんかをする ・彼と一緒の気持ちがわかる ・自分たちでやってみる ・自己主張と活動が活発化する	・自分の考えを表現する ・グループで相談したり、つくったりする ・役割行動の自覚をする	・年少児に対する気持ちを意識する ・生活グループでぶつかり合いと結びつきがある ・生活や仕事に必要感をもって取り組む	・友達の考えや気持ちがわかる ・話し合いや協力ができる ・立場役割の意識と行動が明確になる	・仲間意識が強くなる ・筋道だった話し合いが可能になる ・行動が集団として集結する

≪人とかかわる力の発達過程表≫

縦軸は、「教師の役割」とし、幼稚園教育要領解説から整理したものである。

横軸は本園の教育課程と３カ年の指導計画の中から期ごとに「人間関係」の内容を大きくまとめたもの、そして、その期での具体的な幼児の生活する姿を整理したものである。

この表を使用することにより得られるものは・・・

・幼児一人一人の「人とかかわる力」の実情と、その育ちの経過

・幼児一人一人に対しての指導の方向

・指導（実践）の達成情況の把握と今後の手だて

≪実践のプロット≫

そこで、＜表１＞の実践を、この＜表２＞にプロットしてみたところ次のような結果が得られた。

幼年教育研究会の会員の実践は、幼児の実情に応答した実践であること。その指導は、発達に即してある一定の方向性が見られる。

しかし、ここで問題となるものは、実践の読み取りの正当性である。筆者のみの読み取りでプロットしてものであるため、今後は実践者が自ら自分の保育を点検するために使用する。または、継続的にこの表に実践をプロットしていくことで正当性を見いだしていきたいと考える。

５．おわりに

研究の目的である「本園の保育を創る」と「教師自身の自己実践力評価」については、まだ成果としての結果を得るところまでに至っていない。しかし、本研究で、方向性を見いだせたと言える。

幼稚園現場において、幼児の「ふさわしい生活」を創り出していく過程で、循環していくべきものである計画・実践・反省・評価のうち、曖昧になっているものが教師自身の実践力の自己評価のような気がしてならない。

今後はこの＜表２＞を、幼児の具体的な生活の姿と幼稚園の教育課程との見直しにあわせて再構成し、実践の評価として自己点検していきたい。

＜参考文献＞

・文部省　「幼稚園教育指導要領解説」　フレーベル館　1999

・無藤隆　森上史朗編　「保育講座７　保育内容　人間関係」　ミネルヴァ書房　1990

・文部省　「幼稚園教育指導書　増補版」　フレーベル館　1989

・兵庫教育大学学校教育学部附属幼稚園　「平成 12 年度公開教育研究会資料」　2000

・姫路市立網干幼稚園　「友達と遊びを創りだし自信をもって生活する幼児の育成　幼稚園・家庭・地域との連続的な生活を通して」　1996

NII-Electronic Library Service